



病院機能評価を 受審して

総務部長 中道憲一

理事長から受審の意向が示され、準備としての業務計画、プロジェクトの編成を経て実践と会議の反復、進捗管理の徹底等あったという間の1年間でした。訪問審査ですぐに認定を獲得出来るとは思ってはいなかったものの、全員の持てる能力を出し切った充足感を感じたのは私だけではないと思います。

今回の認定に至る経験は単に評価機構の審査項目のみならず、他に多くの多様な示唆を受けるものとなりました。独断と偏見を承知でいくつか整理すれば以下の通りです。

①開院以来、初めて第三者の客観的な検証評価を受けたことです。その結果、過去連続と続いてきた病院運営の諸施策・習慣・考え方や、あるべき座標等がある程度方向修正されました。

②認定獲得に強い決意で臨んだ理事長のリーダーシップにより、医師集団としての「医局」が活性化しました。病院機能評価は「医局活性化評価」といっても過言ではなく、医師達の全分野への指導性の発揮が決定的要因といえます。

③病院組織は医療従事者としての資格を有する専門家集団で運営されていますが、ともすれば縦割りが強く、個々のグループの事なかれ主義がはびこりやすい風土があり、当院もその例にもれない状況でした。院外の専門家や外部指導者によるインパクトが強力に作用し、役職員全員の参加意識が醸成され、見事な団結力を発揮しました。

④そのことは精神科病院としての存在意義、医療従事者の社会的使命感を喚起し、全職員が最後まで手をゆるめることなく大量の業務をこなしたのです。

⑤各業務を見直し、評価項目に照らし合わせて取り組む過程の中で、コンプライアンスの検証、患者サイドに立った視点、チーム医療の構築や情報管理としての概念管理に基づいた施策が提案され取り入れられました。

列挙すればまだいくつかありますが、以上のような取り組みの推移の中で、新たな「城西病院組織」が再生されていきました。

現在、認定を獲得した満足はあるものの、むしろ本来の精神科医療の観点からいえばスタート地点に立ち返った思いです。当院の目指す方向が一段と具体化されて提示され、やるべきことの意義目的が全役職員に徹底されてきており、急性期病棟の立ち上げを中心とする在院期間短縮の今年度業務計画は、機能評価認定の真の当院の実力を証明するものとなるのではないのでしょうか。

